

# 試合日程とトレーニング期分けの諸問題——上

村木征人（筑波大学体育科学系）

## 1. 試合配置の現状と問題点 ——国際化のひずみ

現在の競技スポーツは、種目の持つ試合運動の特性から、極めて多様な広がりを持つ。伝統的・代表的なスポーツ種目の多くは、近代オリンピック競技大会の発足とほぼ時を同じくして、国内並びに国際スポーツ団体(IF)としての組織化が始まり、それぞれの試合システムを発展させてきた。また、戦後、それ以上に多くのスポーツ種目が生み出され、いわゆる新興スポーツ団体として、競技人口を集め、国内・国際的な組織化を達成、もしくはその途上にあるスポーツ団体も少なくない。

スポーツの発展過程において、合理的な競技試合、並びに選抜システムの形成とルール の確立は、スポーツの組織化に不可欠で、最も中心的な課題の1つであろう。

競技スポーツの試合・選抜システムを考える際の基本原理は、まず第1に、当該競技団体に加盟するすべての競技者(またはチーム)が、少なくともセレクションの第1段階では、平等な条件での参加が可能であること。

第2に、上位試合への選抜過程では、できるだけ客観的な競技成績に基づく選抜基準があらかじめ明示され、それに基づいた合理的な選抜システムが準備される必要がある。

今日、伝統的スポーツとされる多くの代表的スポーツにおいて、それぞれのスポーツ団体の組織化は、国内に基盤を持ち発展してきたものである。また、各国を代表する各スポーツ団体(競技連盟・協会)とて、それぞれの競技者、チームが所属し、独自性を持つ各種のスポーツ団体(実業団・社会人連盟、学生連盟、高体連、中体連、等々)の共同体と

もなっている。ことに、日本ではスポーツ・クラブを学校と企業に依存して、それぞれの独自性が高く、日本連盟はそれらの調整機関としての存在が期待されている。

1つのスポーツ種目内で、それぞれに独自性を持つ各種の競技団体は、それぞれに試合・選抜システムを形成している。主要な国際大会への代表選手の決定に際して、一本化された選抜システムを持たないスポーツ団体では、その合理性が問われることにもなる。また当然、組織間の主導権争いも必至であろう。日本柔道界の全柔連・学柔連問題、アメリカ陸上競技界でのNCAA・AAU問題等々、スポーツ界の内紛も少なくない。

後者のケースは、全米陸上競技を代表する選手、コーチ、役員、さらに競技施設のほとんどが、全米大学競技協会(NCAA)傘下の各大学に依存してきたのに対し、国際連盟(IF)への代表権は歴史的な産物として、全米的組織とはいえないAAU(Amateur Athletic Union)に与えられてきたことによる。

この問題は、1982年アメリカ・アマチュア・スポーツ法案採択とともに、アメリカ・オリンピック委員会(USOC)、並びにNCAAとの協力体制を整えた新組織、TAC(The Athletic Congress/U.S.A.)を誕生させ、唯一の代表団体(National Governing Body)として、AAUから代表権を委譲させ今日に至っている。1960年代末以来、マス・メディア時代の到来とともに、スポーツの急速な国際化を迎えた。各国の代表者が集まり、国際スポーツ連盟(IF)、並びに各地域の国際連盟(アジア、ヨーロッパ競技連盟)の本格的な組織化が促進された。

これら豊富な財源は、オリンピックを初め、

各競技の国際、国内連盟の主催する世界選手権、地域選手権、ワールド・カップ、並びに多くの国際競技会（グランプリ、IF 公認大会、等々）の開催に関連した興行収益である。同時に、西側選手のプロ化促進にも結びつくものであった。

陸上競技のグランプリ大会は、アメリカでのグランプリ大会をモデルに一昨年より開始された。混成競技とマラソンを除く種目が、1年に男女16種目ずつ交互に設定され、上位5試合の得点と、ダブル・スコアが与えられるグランプリ決勝大会との総得点（+世界新、タイ記録得点）で、種目別、並びに総合順位がつけられ、賞金が与えられる。参加資格は、前年の世界ランキング50傑以内の者に限られる。スキーのワールド・カップに準じた試合システムといえよう。

本年は、グランプリ大会の開始以来、初めての世界選手権開催年とも重なったが、多くのアメリカ選手らの例に代表されるように、最重要試合である世界選手権直前まで、積極的に参加してきた選手ほど、本番での競技成績の不振が顕著な傾向をみせている。グランプリ・ファイナルは、しかも、世界選手権のわずか1週間後に置かれ、記録的な低調さが顕著であった。

一連のグランプリ大会でよい成績を挙げることと、オリンピック・世界選手権のような一度限りの最重要試合に照準を合わせ、最高業績を目指すこととは、トレーニング面でも本質的な違いが生ずる。

東欧勢はもとより、グランプリ大会への参加に積極的であった西側選手の多くも、本年は世界選手権への最終準備段階で非常に慎重な試合選択がみられ、グランプリ・ファイナルを目指すものではなかった。

世界選手権、とりわけオリンピックが、国際的にも高い社会的認知を持たれ、最高業績の達成を目指す競技スポーツが、その試合ピラミッド構造の頂点に位置づけられる以上、グランプリ大会は、これらの開催年以外で実施するのがよいであろう。

今年の体操競技の例では、世界選手権は10月18～25日に開催され、日本選手権はわずか1週間後の11月6～8日に開催される過密な



中国とのオリンピック予選は日本リーグのシーズンに重なった試合日程であった。また、その中間には沖縄国体も置かれた。しかも、日本選手権は、来年のソウル・オリンピックへの第1次予選を兼ねており、世界選手権へ出場した選手らにとっては、トレーニングの合理性からも休養・充電期間を取る必要があっても、欠場する余地のないものであったといえる。こうしたなかで、日本選手権では世界選手権代表者らを含めるトップ・レベルの選手のなかから、多くの故障者が続出したことは、過密な試合日程とは無関係ではないように思われる。

サッカーの日本ナショナル・チームとして同様に、本年は、試合日程上の問題を抱えた年のようであった。

日本サッカー界が悲願としていた、20年振りのソウル・オリンピックへの代表権獲得のための、対中国最終戦のさなかに、主力メンバーすべてが、所属する実業団チームの日本リーグ戦への出場を余儀なくされ、ナショナル・チームとしての最終戦への準備は実質的に困難な状態であった。

このほか、1970年代以降、日本の経済力を反映して、国内・外で体系化されないままに、イベント的な各種の国際競技会開催が、各スポーツ種目で林立してきたこともトップ・レベル・スポーツの顕著な現象で、試合日程上に新たな多くの問題を生み出してきた。また逆に、一般競技者の出場できる競技会は減少し、トレーニング成果を試す機会をみつけるのに苦勞するのも現状である。

1. 1年周期						
サイクル	第1サイクル					
期	VP		WP		UP	
月	11~3		4~9		10	
2-1. 半年周期						
サイクル	第1サイクル			第2サイクル		
期	VP	WP	UP	VP	WP	UP
月	10~2	3~4	5	5~7	8~9	9~10
2-2. 年2重周期						
サイクル	第1サイクル		第2サイクル			
期	VP	WP	VP	WP	UP	
月数	4.5	1.5	3.5	1.5	1	
3. 年3回周期						
サイクル	第1サイクル		第2サイクル		第3サイクル	
期	VP	WP	VP	WP	VP	WP
月	10~12	1~2	3~4	5	6~7	8 9

図1 トレーニング周期構造のバリエーション (Lempart, T., 1973)

VP: 準備期 WP: 試合期 UP: 移行期

今日のトップ・レベル競技者は、自らが厳しい選択をしない限り、トレーニングの合理性とは無関係に主催者、スポンサー、競技団体からの出場要請を受け、過密な競技日程にさらされかねない。その原則となるものが、競技的状态 (スポーツ・フォーム) の発達周期の法則性であり、多様なバリエーションを提示する個別性である。

スポーツに試合は不可欠であるだけに、試合日程が、トレーニングの合理性を考慮して立てられた場合、競技成績の改善には積極的な作用が期待しうる。今日の競技スポーツが直面する、国内・外での試合日程上の諸問題の多くは、以下の諸点に起因する。

- 国際試合日程と国内日程との不一致。
- 試合、選抜システムの不完全さ。
- トレーニング施設の欠如による、季節・気候条件からの拘束 (Ex. 室内競技場等)。
- 所属チーム、競技団体間の試合関心の相違。
- 興行的関心と、トレーニングの合理性との対立。
- 試合の、競技的価値と社会的・大衆的価値 (多くはマス・メディアの宣伝・報道量に関係) との相違。

実際には、トレーニング計画は試合日程と密接な関係を持って立てられる。その際、試合日程が、トレーニングの合理性を重視して立てられているほうが、選手やチームにとってはおおむねプラスである。

マトベーエフ・L.P.は、この場合基本的に考

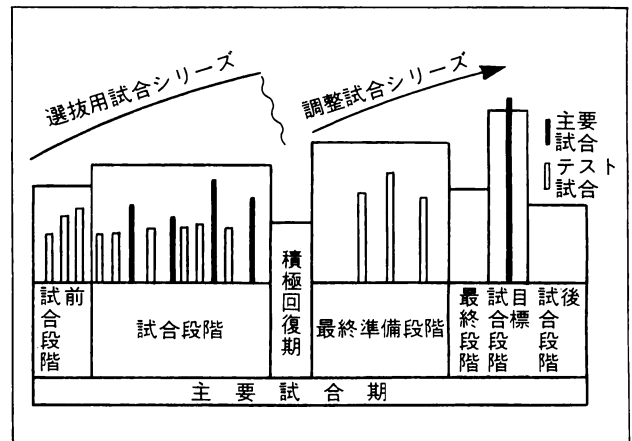


図2 基本試合期の構成モデル (Lempart, T., 1973) に村木加筆

慮すべき条件として、以下の諸点を挙げている。少なくとも、これら諸条件が満たされている限り、試合日程とトレーニングの合理性との間に、解決不能な対立が起こることはないであろうとしている (図1、2)。

- ① 最重要試合が、1つの試合期に集中するように配分する：年間2つ以上サイクルを持つ場合には、それぞれに配分する。
- ② 試合期の長さは、トップ・フォームの平均的維持期間とする。
- ③ 試合の数、及び間隔は、競技能力の回復と改善、向上に十分なものとする。
- ④ 試合の重要性と困難性は漸進的なものとする。
- ⑤ 重要な試合を他の周期 (準備期、移行期) に含めてはならない。
- ⑥ 試合日程は、主要な点で不変であり、伝統にも合致させる。また、競技者の持つ個々の特殊性 (個別性) も軽視すべきではない。一般化された試合日程のなかで、調和のとれた個別性を活かすには、さらに、次の諸点が考慮されるべきである。
- ⑦ 試合日程はすべての競技者にとって同じではないこと：スポーツの種類、競技者の年齢、競技能力で異なる。
- ⑧ 一般的な試合日程の枠内での最小限度の試合以外で、選択可能なより多くの試合を個別に計画する必要性 (テスト・トレーニング試合、等々)。
- ⑨ 一般的試合日程と代表選手の選考・選抜の手順と原則は、できるだけ早く選手やコーチに知らせ、トレーニングを個別化して基本日程に適應できるようにする。

(むらき・ゆきと)